
第1回福沢祐巳が贈る人生相談室

紅い稲妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第1回福沢祐巳が贈る人生相談室

【Nコード】

N3450J

【作者名】

紅い稲妻

【あらすじ】

遂に人生相談室シリーズにマリみて主人公の祐巳が登場します。

楽しんでくれたら幸いです。

リリアン下級生からとお隣りの花寺から親しみ易い女の子として人氣絶大の祐巳が、薔薇さまになって初めてここ数年続いているミニFM局のラジオ番組を任された。

祥子をフォローすべきなのに、フォローどころか、一緒になってボケていたので、スタッフ達は不安でならなかった。

先々代の蓉子は善いも悪いもいろんな意味で切れていたし、先代の祥子は暴走するか自爆するかどちらかだった。

そのため、天然の狸でもある祐巳には全くスタッフは一切の期待はしていなかった。

むしろ、無事に番組が終わるかと心配していた。

OPとEDは各々に任されていて、ここでも個性が出た。

志摩子がクラシックならば、由乃は時代劇番組の曲を選んだりした。よし、ならば、笑いを取るぞ！

すると、OPは安来節と来た。

これを聞いていた祐巳の交遊関係者は全員一致でずっこけていた。受けたというよりは、ドン引きされたと言った方が正解だ。

剣道部で聞いていた島津由乃は、手を滑らせて素振りしていた竹刀を放り投げてしまった。

「や、やるわね、祐巳さん。ちょっと予想外だったわ！」

悔しそうに言くと、田沼ちさとに、

「真面目にやれ〜！」

と頭を竹刀で叩かれた。

それを見て、菜々はケタケタと笑う。

スタジオの隣の部屋には志摩子と乃梨子の二人が祐巳を見学していたが、

「さすがは祐巳さんだわ！なんて素敵でしょう！」

と志摩子は天然振りを全開にしている。

隣で乃梨子はただただ絶句していた。

「瞳子もえらい人を姉にしたな」

そう溜息混じりで呟くのが精一杯だった。

幸い、その瞳子は部活で来ていない。

そんな感じで番組は始まった。

「では、最初の相談者です。もしもし、PNまたはRNをお願いします」

「はい、祐巳ちゃん、元気？ PNは白い悪魔だよん」

プチッとボタンを押して切った。

「どうやら、間違い電話のようです。皆様も電話をかける時は、もう一度、番号を確かめてかけましょう。では、次の方、どうぞ！」

おもっきり、スルーしてやがる！

そう乃梨子は突っ込んでいた。

「PNは演劇命です」

プチッとすぐに切れてしまった。

「ホント、間違い電話が多くて困りますね。次の方です。どうぞ！」

あんた、解っててやってんだろぅぅぅ！

乃梨子は心の中で突っ込んでいた。

「PNは紅い般若です。妹が相手してくれませんか！ しかも、ドリルがそんなにいいのでしょうか？ グスン」

スタジオの空気は一気に温度が下がった。

だが、天然な狸は相手が誰か気付いてませんでした。

「でしたら、丑三つ時に五寸釘で呪いの藁人形をガンガンハンマーで打ち続けたらどうでしょうか？ 効果てきめんだそうですよ。良かったら、また、結果を教えて下さい。志摩子さんによれば、良く効くそうなので、テヘッ」

スタジオ内外でこの話を聞いていた人間全てが、みんなこけていた。ただ、もう一人の天然娘だけはポツと顔を赤らめて、

「祐巳さんったら…。素敵」

なんて、素っ頓狂な事を呟いていた。

その隣でなんとか立ち直った乃梨子だが、祐巳に負けない姉の天然振りに、普段なら、間違いなく祐巳に食ってかかるのだが、今回は沈黙した。

「そう、そうね、解ったわ！有難う！早速、今晚、実行してみるわ！」

そう言うと、紅い般若は様子専属メイド長兼祥子の秘書室室長のアリスに道具を用意させた。

番組終了後、控室で祐巳達はお茶をした。

「祐巳さんって、素敵！最高に黒いわ！」

志摩子の台詞を隣で聞いている、乃梨子は将来に不安を覚えた。完全に黒志摩子モード全開だった。

「えっ、何が？」

と聞き返す祐巳に、乃梨子はもう好きにしてくれと思った。

「えっ、まさか、祐巳さん。紅い般若さんが様子さまだと気付いてないの？」

志摩子の問いに、アハハハと苦笑いする。

さすがに白薔薇姉妹は絶句し、石のようにガチガチになってしまった。

このアマ、天然で黒いんだ！

乃梨子は心の中で絶叫していた。

一息ついたので、外に出ると巨大なハンマーを持ったドリルが待ち構えていた。

「あれ、瞳子、どうしたの？」

祐巳は不思議そうに瞳子を見るが、

「お姉さまは紅薔薇さまとしての自覚がないようですので、不肖、私めが再教育してさし上げようかと思い、参りましたの」

ハンマーを大きく振りかぶると、

「天誅くくく！」

怒号を上げて、祐巳を追い回すドリルであった。

その夜、小寓寺で、

「おのれく！ドリ、ドリ、ドリルめくくく！」

と叫びながら、ハンマーを打ち続ける様子の姿があった。

鉢巻きに懷中電灯を二本挿して打ち込む姿は般若というよりも、映画「八つ墓村」を彷彿させた。

それをニヤリッと笑って影で見ている志摩子の姿も…。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3450j/>

第1回福沢祐巳が贈る人生相談室

2010年10月21日23時40分発行